

28) アンブロワズ・パレの歯科口腔病 医学

東京都立駒込病院 高山 直秀

Naohide Takayama

アンブロワズ・パレ (1510~1590) は近代外科学の父といわれるフランスの最も有名な外科医の一人である。パレの業績は軍陣外科に留どまらず、解剖、流行病、産科、歯科など広い範囲にわたっている。演者はこれまで「パレ全集にみられる歯科領域の記述」と題して本学会でパレの業績を紹介してきたが、本年はパレの没後400年に当たる年であるので、今一度パレの歯科口腔病論をまとめてみたい。

解剖；歯は物をかむ働きがある、生え代わる、死ぬまで生長する、知覚があるなどの点で他の骨と異なっていると述べ、歯の数について正確に記し、切歯、犬歯および臼歯の区別をしている。しかし小臼歯と大臼歯の区別、およびエナメル質と象牙質の区別はなされておらず、また歯髄腔、歯根管については記されていない。乳歯の数および歯の代生に関する記載はない。顎運動に関与する筋肉や舌や口腔の解剖も述べられている。

歯痛；歯痛には先行する原因があると述べ、その原因として歯に流入する流気 (rheume)、熱い炎症および冷たい炎症をあげている。また治療法は、第1に患者の養生、第2に歯肉の乱切や瀉血または浣腸による排膿、そして第3に鎮痛薬の投与であるとしている。また場合によって歯髄を失活させることを勧めている。

齲蝕；齲蝕の原因は「刺激的で辛い体液」であるとし、齲窩に見られる虫（いわゆる歯の虫）は齲蝕の原因ではなく、外から齲窩に入り込んだものと考えた。治療法は焼灼とヤスリによる削除を挙げているが、金や鉛充填については述べていない。

歯垢；歯垢は鉄に生じる錆のようなものであり、錆が鉄を腐食するように歯を侵すと記しており、これからパレの齲蝕に関する理解の一端が知られる。

抜歯；抜歯器具として歯肉剝離器、押し棒と名付けたエレベーター、ペリカンとよぶ抜歯鉗子を示し、患歯の周囲を歯肉剝離器で十分に剝離したのち、押し棒を用いて抜去することを勧めている。抜歯時の注意事項として、暴力的に、あるいは一撃で抜歯しない、歯痛の強いときは患歯の健全歯を間違えないようにする、歯の破折や残根を生じないように、齲窩に鉛や布を詰めたのち抜歯する、などをあげている。

動揺歯、歯の再植および移植；パレは歯の動揺の原因を打撃や墜落のような1次的原因と炎症や体液の腐敗による2次的原因に分けて考えている。外力による動揺に対しては、健全な隣在歯に結び付けて固定すれば再び根づくことを教えている。しかし歯の移植については伝え聞いた症例を記しているだけであり、パレ自身は歯の移植を行っていないかと思われる。

義歯および口蓋栓塞子；前歯が破折したときは、顔の外観を整え、発音を明瞭にするために、骨ないし象牙で人工的に歯を作り、金線または銀線で健全歯に固定することを勧めている。ここに記された口蓋栓塞子は、まさにこの時代に外科医が直面していた新しい困難、つまり銃創あるいは梅毒の後遺症の一つに対する処置として考案されたものである。パレは「この障害の多くは性病のために生じる潰瘍によるものである」と述べており、当時梅毒による口蓋の障害が大きな問題となっていたことを示している。

骨折および脱臼；下顎骨の骨折に際して歯が割れたり、動揺したり、歯槽から外れたならば、元の位置に戻して頑丈な歯に金線や銀線や亜麻糸で結んで固定するように指示している。

腫瘍；エプーリスとガマ腫の記述がみられる。

舌の切断；舌が前額面で切断された場合でも、一部分がつながっていれば、縫合によって治療可能であることを実際の症例をあげて説明している。

潰瘍およびアフタ；小児のアフタ、梅毒による潰瘍、根尖膿瘍に起因する瘻孔、破折歯による潰瘍についての記載がある。

また、歯磨き粉や、いわゆる生歯困難について

も記されている。

考案

パレは歯の解剖から義歯、手術器具にいたるまで一通り記しているが、内容的には十分なものではない。しかしギリシャ・ローマの医学が経験しなかった梅毒による口腔の障害を明らかにし、これを治療するための口蓋栓塞子について初めて記した意義は大きいといえよう。さらに切断された舌を縫合によって保存できると教えたこともパレの独創性から生まれたものであったと思われる。

29) 麻酔学書誌学的研究 (第5報)

—頓宮 寛編「伝達麻酔法」—

Bibliography of Anesthesiology (5 th Report)
—on “Conducton Anesthesia” Edited by
H. Hayami—

日本大学松戸歯学部 ○石橋 肇
土屋 裕子
池田かのり
谷津 三雄

Hajime Ishibashi, Yuko Tsuchiya, Kanori
Ikeda and Mitsuo Yatsu, Nihon University
School of Dentistry at Matsudo

演者らはわが国における麻酔学書誌学的研究について、その第1報を第14回(昭和61年)本学会において「シュライヒ原著 無痛手術 全について」、第15回(昭和62年)に「麻酔学書誌学的研究(第2報) —喜多村敬次郎著『局所麻痺法 全』(大正5年刊)について」、第16回(昭和63年)に「麻酔学書誌学的研究(第3報) —『日本内科全書、貳巻』にみられる麻酔に関する記述—」、また、第17回(平成元年)に「麻酔学書誌学的研究(第4報) —『外科手術關鍵 上・下巻』について—」をそれぞれ報告してきた。

今回は演者らの一人谷津が架蔵する近世医学叢書、第73編、医学士頓宮 寛編「伝達麻酔法」を資料とし、わが国における麻酔学史の一端としたい。

本書は 15×22.5 cm 大、洋本、全 98 ページ、大正 4 年 1 月 5 日刊、正価金 50 銭、南江堂書店発行で、目次からその内容をみると「第壹編 總論」(1~18)と第二編 各論(19~98)からなる。第1編の第1章の緒言に「伝達麻酔法ノ歴史ヲ尋ルヌニ此ハトルゼリニ、フラインベルヒ、アルムス氏等ノ動物試験ニ創ル、氏等ハ動物ノ神経幹ニコカイン溶液ヲ注射シ知覚及ビ運動麻酔ヲ認メタリ、斯クテ本法ヲ創メテ人類ニ応用セシハコーニング及ビゴルトシャイデル氏ナリ、コーニング氏ハ外側前膊皮神経ノ神経幹ニ四%コカイン溶液〇・三 c.c. ヲ注射シ同時ニ上膊ニ縛シ該神経ノ分布領域ニ於テ皮膚ノ知覚麻酔ヲ得タリ、ゴルトシャイデル氏ハコカインノ濃厚溶液ヲ前膊皮下ニ注射シ該部神経分布ノ方向ニ於テ知覚麻酔ヲ認メタリ。麻酔溶液ハ二種ノ方法ニ拠リ神経幹注射ニ用ヒラル、一ハ神経鞘内注射法ニシテ注射針ノ先端ヲ以テ神経鞘ヲ貫キ神経繊維間ニ注射スル方法ニシテ麻酔溶液著シク稀薄ナラザル以上ハ麻酔作用ハ注射直後ニ出現ス可シ、此ノ方法ハ手術ニ拠リ神経幹を露出シテ行フトキハ奏効確實ナリトス、他ノ一ハ神経鞘外注射法ニシテ神経幹付近即チ神経鞘ノ外部ニ注射スル方法ニシテ麻酔ガ出現スルマデニハ相当ノ時間ヲ要スルモノトス、而シテ神経ヲ露出スルコト無クシテ皮膚面ヨリ間接ニ注射スル場合ニアリテハ針ノ先端ハ多クハ都合好ク神経幹内ニ達セザルモノト知ル可シ」の内容は今昔の感が深い。また「麻酔溶液」の項に「局所麻酔薬トシテハノボカインノ外ニコカイン、オイカイン、トロパコカイン、アリピン等多数存在スレドモ吾人ノ伝達麻酔法ニ於テハノボカインヲ称用ス、是レノボカインハ効果拔群ナルコト、多量ニ使用スルモ中毒作用ヲ呈セザルコト、及ビ熱消毒法ヲ行ヒ得ルコトノ諸点ガ他ノ数多麻酔薬ニ卓越スル所以ナリ」の記載から75年前の局所麻酔薬の種類を知り得る。また「局所麻酔溶液ニアドレナリン又ハズブラレニン等ノ副腎製剤ヲ添加スルコトハ既ニ汎ク行ハル、是レアドレナリン、ズブラレニン等ハ血管ノ収縮ヲ促シテ局所ニ貧血ヲ起シ此ノ血管収縮ハ麻酔溶液ノ吸収ヲ疎碍シ以テ其ノ効果ヲ増進セシムルト同時ニ吸収ニ